

高齢患者の薬剤の理解に影響する要因の分析

岸田 研作 岡山大学

谷垣 静子 鳥取大学

要旨

本稿の目的は、高齢患者の、医療機関から出されている薬の副作用、効能、名前の理解に影響する要因を明らかにすることである。データは、調査会社とモニター契約を結んだ70歳以上の高齢者790人である。被説明事象は、出されている薬の数に占める（高齢者が）副作用（効能、名前）が分かる薬の数の割合である。推定は、プロビット・モデルで行った。最終的に分析対象となったのは、490人であった。出される薬の数が増えるほど、理解できる薬の数が少なくなった。世帯員が3人以上の場合、理解できる薬は少なくなった。医療費の償還制度や所得税の還付制度を知っている場合、理解できる薬の数が増えた。本稿の限界点としては、調査対象者が薬の副作用を理解していることを示す客観的な基準が無いこと、理解しているか否かが調査対象者の判断に任されていることがあげられる。